

I—太陽と月 (天空の明暗)

日付	日出 (星座)	日没	日付	夜半月齢	月出 (星宿)	月入
日	時分	時分	日	日	時分	時分
1	4 44 (うし)	7 7 8	1	19.1	22 36 (いて)	7 47
6	4 43	7 7 8	2	20.1	23 14 (やぎ)	9 1
11	4 42	7 7 11	3	21.1	23 47 ( )	10 18
16	4 42	7 7 13	4	22.1	— — (みづかめ)	11 21
21	4 43 (ふたご)	7 7 14	5	23.1	0 17 ( )	12 28
26	4 44	7 7 15	6	24.1	0 45 (うを)	13 31
翌1	4 46	7 7 15	7	25.1	1 12 ( )	14 35
			8	26.1	1 42 ( )	15 38
			9	27.1	2 14 (ひつじ)	16 41
			10	28.1	2 50 ( )	17 43
			11	29.1	3 31 (うし)	18 42
			12	0.4	4 19 ( )	19 35
			13	1.4	5 11 (ふたご)	20 23
			14	2.4	6 7 ( )	21 4
			15	3.4	7 5 ( )	21 40
			16	4.4	8 3 (かに)	22 11
			17	5.4	9 1 (しんじゆ)	22 39
			18	6.4	9 59 ( )	23 4
			19	7.4	10 56 ( )	23 29
			20	8.4	11 55 ( )	23 54
			21	9.4	12 53 (おとめ)	— —
			22	10.4	13 56 ( )	0 20
			23	11.4	15 2 ( )	0 51
			24	12.4	16 12 (てんびん)	1 27
			25	13.4	17 24 (きそり)	2 11
			26	14.4	18 33 (へびつかひ)	3 6
			27	15.4	19 34 (いて)	4 11
			28	16.4	20 27 ( )	5 24
			29	17.4	21 10 (やぎ)	6 40
			30	18.4	21 46 ( )	7 56

今月10日は所謂「時の記念日」であつて、日本全國の人々が時刻や時間の重要さを考へ、又天文と時との關係を思ふ日である。殊に一般の人生に時を與へる天體は言ふまでもなく太陽であつて、太陽と時刻との關係は深い。天文年鑑の第8頁から第19頁までの毎月の太陽表を見ると、「時差」といふ欄がある。之れは太陽を直接に觀測して得た「眞平均時」と、「平均時」との差を示すものであつて、

$$(\text{眞太陽時}) + (\text{時差}) = (\text{平均時}) = (\text{常用時})$$

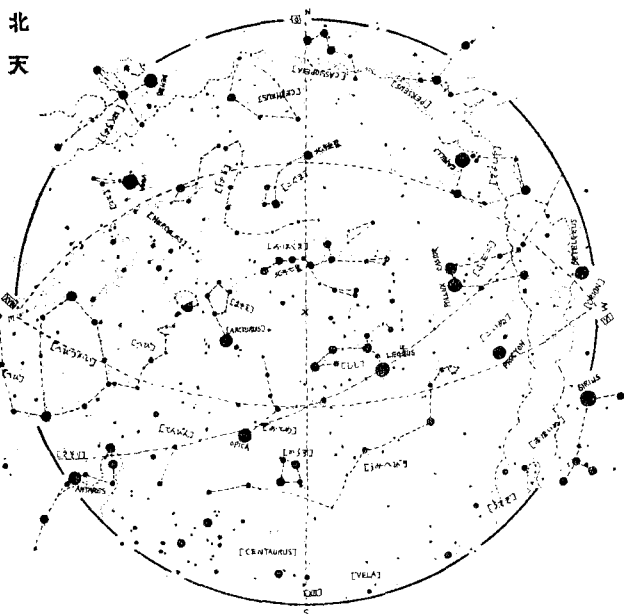
といふ關係になる。今若し天空に『平均太陽』と呼ぶ假想天體があると考へれば、年鑑により

1934年6月	日	時差 +2 <sup>m</sup> 31 <sup>s</sup>
	6日	+1 43
	11日	+0 46
	16日	-0 16
	21日	-1 21
	26日	-2 25

の中で、+は平均太陽が眞の太陽の西一は、年鑑により、東にある事を示す。即ち、それだけ觀測を修正して常用時を得ることになる。

## 昭和九年六月の日没後の天空

(恒星時 12時 0分)



### II. 六月の天象

1日	5時分	海王星が東矩	
2,	7:	金星と天王星との會合	
3,	21: 43	土星と月との會合	
8,	14: 18	天王星と月との會合	
9,	5: 38	金星と月との會合	
夕	20:	土星が停留	
11,	8: 11	火星と月との會合	
夕	14:	木星が停留	
14,	16:	水星が東へ極大離角	} 始めて水星を 見る人に便利
夕	16: 06	水星と月との會合	
19,	6: 22	海王星と月との會合	
20,	5:	水星が降交點	
22,	1: 05	木星と月との會合	
夕	11: 48	夏至	
27,	23:	水星が停留	
28,	0:	月が射手座シグマ星を掩蔽する!!	
30,	12:	水星が遠日點	

## 札幌の下保茂氏より

拜 啓

長らく御無沙汰致しました。黄道光観測の御勧め有難度う御座いました。観測は暫らく取紛れて忘つておりましたが、只今黄道光の統計的調査を進めて居ります。我が國の同志によつてなされた記録より導き出した統計と外國のそれとの比較或は理論の検討などやりたいのですが、大分長いものになりさうです。それに、自分の力の不足と参考文献がないのとで、とても満足なものにはならぬでせう。殊にホフマイステルの最近のを見たいと思ひますが、一寸間に合ひません。

北海道で非常に早く天體観測が行はれたことを最近知りました。

観測家は例のブレキストン線で動物學上有名な函館の英商トーマス、ライト、ブレキストンで彼は文久元年頃函館にきまして、商賣の傍ら動物など蒐集して居りましたが、函館に物騒な出来事の多かつた明治初年、二三の若い人達に機械を携帯させて、函館の大森濱や龜田海岸大沼、鹿部などで天體の観測を行つた。街の物好きな若い者達は喜んで機械を持ちながら彼に隨行した。こうして彼の天文研究は當時開拓使に九等を以て出仕して居た福士成豊に傳へられた。

ブレキストンは又、明治五年福士から開拓使に對して測候の必要を説かしめ函館の船場町九番地にあつた福士の自宅に設けたのが日本最初の測候所である。福士は前から開拓使に仕へて測量方面に功勞があつたが、函館測候所をして吾が國最初の測候所たる榮譽を荷はしめたのは彼福士と英商ブレキストンの功績であらう。

ブレキストンの天體観測は市民を驚かした一事であつたが、函館にはこれより先安政六年開港と同時にやつて來たロシヤの醫師アルフラケットが「遠めがね」を持つて來た。彼は萬延元年まで居つたのであるが、この「遠めがね」は市民の驚異の種であつた由です。

以上の事は或は既に先生の御存知の事と思ひますが、興味があると思ひまして書いて見ました。

五月二十二日

下 保 茂

山本一清先生御侍史